

The Factors Associated with the Selection of Early Excision Surgery for Congenital Biliary Dilatation with a Prenatal Diagnosis

白井, 剛

<https://hdl.handle.net/2324/7182327>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 : © 2023 Elsevier Inc. All rights reserved.



氏 名： 白井 剛

論文名： The Factors Associated with the Selection of Early Excision Surgery for
Congenital Biliary Dilatation with a Prenatal Diagnosis

(先天性胆道拡張症の出生前診断症例に対する早期手術選択因子の検討)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】先天性胆道拡張症（CBD）の出生前診断症例における適切な管理を明らかにする。

【方法】出生前診断されたCBDで肝外胆管切除手術時に肝生検を施行された13例において、F1以上の肝線維化を認めた群（グループA）と肝線維化を認めなかった群（グループB）に分け比較検討した。

【結果】切除手術はグループA（F1からF2）でより早期に施行され、中央値は日齢106であった（ $p=0.04$ ）。2群間の術前において、症状の有無、嚢胞内胆砂の有無、嚢胞サイズ、血清ビリルビン値、血清ガンマグルタミルトランスペプチダーゼ（GGT）値に有意差を認めた（ $p<0.05$ ）。特に、グループAでは、出生後から一貫して、遷延する血清GGT値の上昇と大きい嚢胞を認めた。肝線維化の存在を予測するcut off値は、血清GGTは319 U/l、嚢胞サイズは45 mmであった。観察期間中に術後の肝機能検査、合併症に2群間で有意差は認めなかった。

【結論】出生前診断されたCBDにおいて、症状に加え、出生後の経時的な血清GGT値と嚢胞サイズは進行性の肝線維化を予測し得る。